

## 飛行場設定隊の衛生兵

山形県 島 貫 莊兵衛

私は大正十一（一九二二）年一月五日、山形県西置賜郡豊原村大字萩で生まれました。男子一人、女子五人の六人兄弟の長男です。家は田が二町一反の普通の上のクラスの米作農家で、父母共に健在でした。

徴兵検査は昭和十七（一九四二）年七月で、第一乙種合格の現役編入で、兵科は衛生兵でした。当時の世相では軍隊に入れることは男子として本懐でありました。ただ衛生兵になぜ指命されたのか判りませんでした。

年の暮れに入隊通知がきて、それには昭和十八年一月十九日に広島に集合とあり、いよいよお国のために御奉公できるぞと気持ちが高ぶりました。

昭和十八年一月十八日、豊原村を舟山敏雄氏と二人で出発、村の人達に送られて米坂線の萩生駅

から出征しました。

十九日、広島駅に到着、指定の宿屋に集合しました。山形県出身者が四十三人、宮城県出身者が七人で、合計五十人が集合しました。行先は満州ハイラルの第三二一部隊で、正式名は関東軍ハイラル第一陸軍病院でありました。

その原隊のハイラルから伍長さんが我々初年兵を迎えに来ていました。宿舎で、家から着ていた物一切を脱いで、軍隊用の下着から軍服までに着替え、脱いだ物を纏めて小包にし荷札をつけて家に送り返すことにしました。軍隊では体に合わせるのではなく、服や靴に体や足を合わせるので、この理屈にまず、とまどいを感じさせられました。何もかも全く新しい社会に入れられ、今までの世間の常識が通用しないことを理解するのに相当の日数がかかりました。

ごわごわした軍服（冬服）の上衣を着て皮の帯革を締めると、流石にきりっとして軍人らしくな

り、気も引き締まりました。加えて帯剣を腰に吊り、襟に一ツ星が着き、軍帽を目深にかぶると我ながら帝国軍人の一人になれたと喜びが湧いてきたことを六十年経った今でも思い出します。小銃は衛生兵のためか渡されませんでした。

昭和十八年一月二十一日、広島駅から列車で下関に行き、釜山行きは輸送船に乗せられました。船室の丸い窓から見える玄界灘の荒波は、護衛の駆逐艦が、我々の船を前になり後になりながら護つてくれている姿が見え、有難いことだと思つた思い出があります。

釜山に上陸した時に「ニンニク」の臭いがし、途端にこれが大陸の臭いだなあーと思ひました。その後、朝鮮半島を北上、寒々とした沿線の農村風景を眺めながら鮮満国境を越え、満州国領内に入り、広大な大陸にびっくりしながら満州国四平省四平街邸屯の独立歩兵第六十二部隊に入隊しました。

その時は古年兵はノモンハンに行つていて留守だと教えられましたが間もなく帰つてきました。そこで二カ月間歩兵の訓練と教育を受けました。

三八式歩兵銃の扱い方も教えてもらいました。歩兵としての基礎教育を受けたものの一期の検閲を受けることなく、二カ月間の歩兵教育を終えてハイルの第一陸軍病院に復帰して、今度は本職の衛生兵教育を二カ月間受けました。教育係に上等兵とその上に伍長がいました。ホータイの巻方、三角巾の使用法、担架で患者の担送法や衛生学料等々を教えてもらいました。

病棟は内科、外科、伝染病科等があり、私は内科の病棟勤務でした。そして夜は不寝番、昼間は患者の看護、静脈注射等でありました。

初年兵は古年兵の身の廻りの世話もしなければなりません。古年兵は九州出身者が多く、気の荒い人が多いのでビンタを相当もらいました。

昭和十九年七月十五日、一選抜の上等兵になつ

た頃に内地の情況も厳しくなり、米機の空襲も激しくなり、飛行場の分散配置が盛んになってきました。内地の九州の都城に西部第一三六部隊が新設されました。これは飛行場設定部隊で、その第三中隊の衛生兵要員に私が採用されたのでした。

七月二十日頃、ハイラルを出発しハルピンで集合、釜山から九州の門司港に上陸、大分県の日の出台に一週間滞在し、都城飛行場に赴いた時に、ちよと米軍機の爆撃に遭遇し防空壕に退避しました。

満州では遭遇したこともない事態を内地へ来て初めて体験し、この戦争の行方に一抹の不安が感じられました。

飛行場の真中に大きな穴があいていました。日本が初空襲された時のことでした。着任の申告もそこそこにして復旧工事にかかりました。トラック十台分の土を投げ入れて、転圧機で十分に転圧し、復旧しましたが、これが内地着任早々の仕事でした。幸い負傷者も無く、衛生兵としてはまあ

まあの出発でした。

この飛行場設定大隊は満州全体からの寄せ集めた部隊で、ハルピンで団結式をやりました。設定隊とは名ばかりで飛行場の爆撃の跡始末ばかりで、日の丸の飛行機が飛んでくることは全くありませんでした。一カ所の飛行場に固定することなく何か所も受け持っていたのか、時には一カ所に三カ月も滞在することもありました。

公民館か民宿に寝泊まりすることもありません。部隊の給与は例にもれず代用食になり、腹具合が悪くなる兵隊が多くなり、衛生兵の私の出番が多くなってきました。隊の装備はトラック十五台、ブルドーザー五台、ローラー車五台等でした。

私は満州から都城に転属する時に、特に許可されて山形へ二泊三日の休暇をもらって帰っておいしました。

終戦になって都城で部隊が解散になり、何も持たず自宅までの交通切符と米を三日分持って家へ

帰りました。八月二十日でした。

昭和二十一年三月に結婚、現在一男三女の親として農業に励んでいます。

### 北滿勤務について

山梨県 小林 要吉

私は大正七（一九一八）年二月一日、山梨県北巨摩郡葦崎町水神に出生、昭和八（一九三三）年三月、葦崎小学校高等科を卒業した。書き方を得意とし成績は上位でした。

昭和十三年、徴兵検査は甲種合格で、昭和十四年一月入営となり、入営する者二十人を代表して挨拶をした。大阪で検査を受け数日して大阪港を出て大連港、奉天（瀋陽）、新京（長春）を経て琿琿へ着く。二月のこととて寒く、便所の時だけ甲板に出る。

一部隊は満州国黒河省第六国境守備隊第二中隊（中川隊）に入隊。私は速射砲隊に配属され、砲の口径は一七〇ミリ、五人で一門で三人で牽引する。時に馬で引く場合もある。ノモンハン事件で「ソ軍」の戦車に苦しめられたことから、速射砲